View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

学校教育実践学研究，2018，第 24 巻，47 − 54 頁

シンガポールの教育におけるキャリア形成支援
−ECG の取り組みから−

劉　一杰*・山崎　茜**・エリクソン　ユキコ**
大國　綾子*・栗原　慎二

（2017 年 12 月 21 日受理）

Career development support in Singapore education system
—The ECG approach—

Yijie Liu, Akane Yamazaki, Yukiko Ericson, Ayako Oguni and Shinji Kurihara

The aim of this paper is to examine the Education and Career Guidance (ECG) program in Singapore, and acquire implication for further development of Japanese carrier education. This research draws upon the previous studies and inspection tour in Singapore, focusing on the education system, structure of ECG, and implementation of ECG. The ECG program promotes lifelong learning ability to prepare the students for their future, provides three-tier-support system according to individual needs, deploys ECG counselor to promote the program, and assure the quality of the program and skills of ECG counselor and teachers by providing trainings. The finding implies that the future Japanese carrier education needs to deploy carrier education professionals, and provide the three tier-support system as well as to improve training system and implementation.

Key words：singapore education system，education and career guidance

問題と目的

日々新しい分野・職業等が生まれ，職業の多様化が進むとともに，雇用の流動化や仕事と生活の調和の進展等，産業構造・就業構造が大きく変化しており（文部科学省，2011），こうした社会で自己実現をしていくためにはキャリア教育を充実させていく必要がある。そして，こうした状況は日本だけではなく，世界中でも起きていることであり，世界各国でキャリア教育の発展が進んでいる。その国の 1 つとしてシンガポールがあげられる。シンガポールは Education and Career Guidance（以下 ECG）というキャリア教育プログラムを開発し急速にキャリア教育を発展させている。そこで，本稿ではシンガポールのキャリア教育を教育事情，ECG の構造，ECG の実践の視点から調査し，その分析を行うことで，今後の日本でのキャリア教育の在り方について示唆を得ることを目的とする。

方法

1）教育事情と ECG システムについての文献研究

2）ECG システムと ECG 実践の視察調査

i）ECG システム

2017 年 7 月 24 日に MOE によるガイダンスを受ける。

ii）ECG 実施

2017 年 7 月 24 日に Yusof Ishak Secondary School，2017 年 7 月 26 日に Republic Polytechnic に訪問し，ECG 実施に関するガイダンスを受ける。

シンガポールの教育事情

シンガポール共和国は東南アジアに位置する

*教育学研究科博士課程前期，**教育実践総合センター

島国であり，東南アジア唯一の華人系国家である。西洋的なシステムを取り入れた科学技術立国を目指し，今では元宗主国イギリスの経済水準をしのぐほどの発展をとげつつある（山内，2006）。そして経済の成長に伴い，シンガポールの教育システムも様々な変化と発展をとげている。

特に 2010 年代に入ってからは，国家が教育領域に対して約 16%という高額の予算をかけていることもあり，急激な速度で教育改革が進んでいる。教育システムの国家的・組織的設計という意味で用いるならば，シンガポールは，教育計画の最も忠実かつ積極的な実践国であるといえる（山内，2006）。

シンガポールの教育システムが発展したのは，国家を存続させるために必要だったからである。1960 年代と 70 年代では，シンガポールが独立したことによって生まれた高失業率を改善するため労働集約型産業の発展を図る経済策略をとっていた。その労働力を保障するため，まず小，中学校の量の拡大を優先させた（SIM CHOON KIAT，2009）。さらに 80 年代から 1996 年までは，教育を通して労働力を確保し，経済発達の促進を図った。21 世紀に入ってからは，科学技術の発展に伴い，世界中が政治的，経済的に急速な変化を遂げており，その結果として職種の増加や急速な職業の需要の変化が見られるようになった。

この変化の中で，児童生徒には時代に適応し自身を成長させる能力の必要性が高まっている。そこでシンガポール政府や教育省（日本の文部科学省に当たる機関 Ministry of Education，以下 MOE）は，こうした能力の育成を重視する教育システムを整備するようになった。

MOE の理念と政策

MOE は「人材は最大かつ唯一の資源」という理念のもと，生徒の願いを実現し，生徒自身が到達できる最高点に行けるよう，教育システムを進化させ続け，願いを叶えることができるようにサポートを提供している。

シンガポールでは，教育政策と労働政策を一体的に遂行することが基本である「マンパワー理論」を用いて，限られた人的資源を効率的に最大化させなければならないと考えられている（SIM CHOON KIAT，2009）。そこで，MOE は，経済発達への人材育成と労働力提供を目標として，生涯学習を実現できる人材を育成することを掲げている（山内・杉本，2006）。このような目標を踏まえ，MOE は様々な政策や教育プログラムを打ち出し，教育システムと人材育成の促進を目指している。

今回の視察の初日に MOE で受けた説明によると，その政策の前提として，MOE は，発展し続ける不確定な経済に備えて，学業成績や学歴だけに注目しすぎず，生涯学習する能力を身につけることが重要であると考えている。学位や成績は生涯にわたって学習する能力を有していることの指標ではあるが，それを得たとしても学習は継続すべきものである，ということを掲げている。未来の多様化するニーズに備えて，長期的に教育システムを改善，強化することを通じて，生涯学習社会の基盤を整備することこそが一番大事なことであると考えられている。

また，MOE の生徒指導部門では，21 世紀において最も重要なことは，生徒の社会的な関係作りと情動的能力の育成であると考えられている，とのことだった。一人一人の生徒の個人の能力を伸ばし，自身の能力を最大限に開発することも非常に重要だが，社会的に他者とよい関係を作ることも，これから生徒たちが社会に出てより順調にキャリアの道を歩むためには大切だとされ，また，子どもたちの社会性と情動的能力を育てることはレジリエンスの育成にも繋がると考えられているからである。

MOE は生徒の指導のモデルとして，TSS（Tiered System of Support）を取り入れている。これは生徒のニーズや特徴にあわせて，段階別にサポートを提供するシステムである。

このシステムは三層あり，上の層になるにつれて対象となる子どもの量は減るため，他国の三層モデルと同じく，シンガポールでも第一層の予防的教育に特に力を入れている。この予防的教育では，カリキュラムを通して，教育プログラムの一つである SEL（Social and Emotional Learning）を実施することで，生徒の社会性と情動の発達を促進，そしてレジリエンスの強化に繋げている。

この予防的教育の促進も含め，教師が生徒によりよい関わりができるよう，教師の専門性の向上を支援すべく，多様なカリキュラムと体験が提供され，教師は毎年 100 時間の専門的な研修，訓練を受けており，技能や技術を修得している。また，学校教育では公共機関，教育に関わる関係者が介入しており，多数の会議において学校にも様々な

	Primary（初等教育）	Secondary（中等教育）	Upper Secondary/JC/CI（高等教育：予備校等）	ITE/Poly/AU/AI（高等教育：大学相当）
自分って何者？ 自分について より深く知っておくことが，教育やキャリアパスのよりよい意思決定につながる。	誰しもが個性を持っている。 自分の価値は何か，どんなことに興味があるか，どんなことが得意かを見つけよう。	自分の興味や能力，情熱を見つけたり，広げたりしよう。 何を学びたいか，どんなキャリアを積みたいかをそれらとともに持っておこう。	自分の興味と強みを広げることを続け，将来自分の専門性を使って有意義に社会貢献できるようにしよう。	準備ができた時に興味を持つ事はとてもいいこと。自分の興味が見つかったら，それを探求し深めよう。
どこへむかうの？ “いきどまり”はない。色んな道がある。	様々な学びの道を探索し，職業世界について学ぼう。	オプションを探す事を始めよう。 職業世界について学び，教育やキャリアの道のりは色々なものから選ぶ事ができることを学ぶ事には価値がある。	あなたは多くの継続的な学びや評価の機会を通して自分の大志を追いかけることができる。	あなたのキャリアのゴールを実現するためには数多くの道がある。働き一学ぶ道はあなたが労働経験を得る事につながり，同時にあなたのスキルを深める事にもなる。
どうやって達成するの？ 自分で自分の目標を持ち，それに向かって進んでいく。学び続け，そしてへこたれない。.	学習上のゴールに向かって進もう。セカンダリスクールについて学び，教育の道筋を探索しよう。	自分の決定に従おう。 自分の教育やキャリアのプランについて，熟慮した意思決定できるようにスキルを伸ばそう。 自分のオプションについて保護者や先生，ECGカウンセラーと話し合ってみよう。	自分のゴールに責任を持とう。将来の学びや労働について熟慮した意思決定をするスキルを深めよう。 周りにあるキャリアの機会や将来訪れる機会について考えてみよう。 働く事への移行スキルになじみを深めよう。	自分が興味を持った領域が固まったら，それを好きになれるようそれに集中して学んでみよう。 自分の適性を試すために，適切な労働経験や，ポートフォリオ，インターンシップの機会を確保しよう。
私たちのだれもが自分自身の職業専門性を高めるように働くことができる。 どんな仕事にも誇りを持ち，価値づけていくことができる。 へこたれず，学び続けよう –適応的であり，へこたれないために21世紀型の適性，価値，職場へのレディネススキルを伸ばそう。				

シンガポール教育局(2017)．ECG Framework and GB's Key ECG Messages

Figure 1 各発達段階のECGのねらい

意見や要求をあげることで，その意見をよりよい学校作りのための参考にしている。

前述のように，シンガポールの教育の最終目標は生涯学習が可能な人材を育成することであり，自身の最高到達点を目指すことが重要である。そのために，まず自分自身と自己の能力を客観的に考え，その情報を基盤として生涯を通して自分の能力を最大限に発展させることが必要である。これを実現するため，シンガポールでは，Education and Career Guidance（以下 ECG）というキャリア教育活動の強化を重視している。なお，このキャリア教育は SEL の中に位置づけられていた。

ECG システム

ECG の目的とは，①豊富な情報を提供すること，②社会の発展にあわせた，総合的な，質が高い教育と研修システムを発展させること，③技能と管理面のスキルで雇用者にいい印象を与えること，④生涯的な学習文化を促進させることで，生徒に必要な知識，スキルを身につけさせて，社会性の発達や適応力，レジリエンスを育て，自分のキャリアの道を設計し決断を下す力を育成することである。

ECG は，生徒が自身の能力を発達させるために三つの重要な質問を用意している（Ministry of Education, 2017）。その三つのクエスチョンとは，①自分は何者なのか（自分のことをよりよく知る），②何を目指しているのか（可能性があり，自分が納得でき，実行できる教育の探求とキャリア選択の能力の育成を促す），③どうやったらそこに到達できるのか（生徒に豊富な情報を与えた上で自己決定をさせ，計画性を高め，個々の思い描く未来を実現させる），である。

小学校 5，6 年の生徒，中学生，高校生，大学生そして成人，すでに仕事についている者や研修者も含め，カウンセラーと教師たちは，この三つのクエスチョンを踏まえ，自己評定や様々な学習交流，面接研修などから，生徒が自分を知り，自分の居る環境を知り，そこから今後の学業やキャリア発達への計画をよりよく立てられるように教育をすることを大切にしている。

また，ECG 教育には四つの柱がある。第一の柱

はECGカウンセリングであり，これはスクールカウンセラーとECGカウンセラーによって行われる。第二はECGカリキュラムであり，これは担任教師や講師によって，授業や講義を通して実行される。第三は能力や才能の構築であり，これをコーディネートするのはECGカウンセラー，またはMOEのECGユニットである。そして第四はパートナーシップであり，ECGカウンセラーが，学校と様々な教育機関や企業の連携をコーディネートしている。

シンガポールのキャリア教育は，1999年からWhole-school approachを通して行われており，学校でのECG教育の実行は，生徒指導のモデルとしてあるTSS同様，三層に分かれている。

第二層は丁寧な支援が必要な一部の生徒，第三層はさらに丁寧な支援が必要な特定の生徒であり，この二つの層では，スクールカウンセラーにより，個人，またはグループへのカウンセリングが行われている。

しかし，シンガポールのECG教育の中で最も重視されているのは，第一層の，全ての生徒を対象としているECGカリキュラムの実行である。

この層における実践者は第二，第三層とは違い，教育を主に実行するのは担任教師，講師，そして個別の指導員である。その際，シニアECGカウンセラーやコースマネージャーはコーディネートの役割，HOD（Head of Department：部門のトップの責任者）はモニタリングの役目を担っている。また，教師だけではなく，保護者と教師のミーティングなどを通し，生徒とのより深い信頼関係を作り上げることもECGカリキュラムの内容の一つとされている。つまり，ECG教育は，ECGカウンセラーだけが担当として行っているものではなく，学校全体，そして保護者も実践の一員として，大きな枠組みで行われている。

また，人生の発達段階の違いによってECGの指導の着目点には違いがあり，9-12歳が意識構成段階；13-16/17が探索と計画段階；17/18以上が発達と転移；最終的に仕事についてからは確定とマネジメントというアプローチをしている。

そこで，実際のECGの指導では，各発達段階に沿ってゴールを細かく具体的に設定している（Figure1）。これを踏まえて，生徒は四つの重要な目標要素：「自分が何者であるのかを理解する」，「自分が納得できる進路を選択する」，「意志決定をし実行する」，「生涯学習と忍耐強くある」，を学習することが求められている。

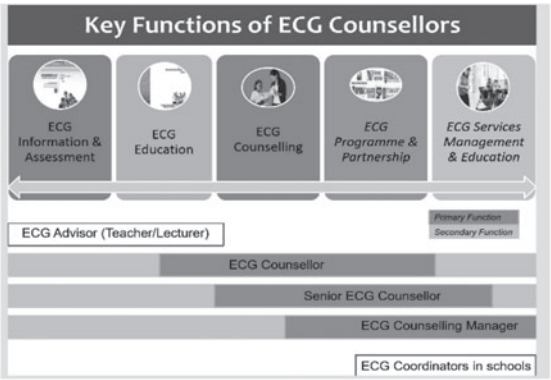

Figure 2　ECGカウンセラーの機能

これをよりよく実現するため，MOEは質の高いECGカウンセリング，充実したECGカリキュラムと専門性の養成，保護者や地域，各機関との連携を非常に重視している。

ECGカウンセラーの役割と研修

質の高いECGカウンセリングを行うためには質の高いECGカウンセラーが必要である。ECGカウンセラーはキャリア領域に対応するカウンセラーであり，五つの重要な機能がある。それは，1)ECGの情報や知識，アセスメントを提供する，2)ECG教育を行う，3)ECGカウンセリングを行う，4)ECGプログラムと連携の発展を促す，5)ECGサービスのマネジメントと教育を行う，の五つである。

しかし，ECGカウンセラーはこの五つの機能をすべて平均的に担当しているのではなく，ECGカウンセラー，シニアECGカウンセラーとECGカウンセリングマネージャーによって，機能の重点に違いがある（Figure 2）。

ECGカウンセラーの役割は四つの側面からなる。一つ目は，学校のECGプランやその年の一年間のECG教育の着目点に対しコンサルテーションを提供することである。そしてプランや計画だけではなく，教師がECGを実行する際に必要な基本的なスキルと知識のトレーニングを提供する役割も担っている。

二つ目は生徒に，グループのキャリアカウンセリングと一対一のECGカウンセリングを提供することである。

三つ目はECGの体験を提供することである。例えば，ECGのプログラムの計画やコーディネート，企業，経営者との連携の確立，シニアECG

カウンセラーとコースマネージャーと連携をとり，イベント（キャリアトーク，フェア）を開催する，などがある。

最後は保護者とコミュニケーションをとることである。Year Heads，HOD，スクールカウンセラーと連携をとり，保護者との話し合いを通して，保護者が子どもによりよい関与をできるようにリソースを提供することも，ECG カウンセラーの重要な役割のひとつである。

以上のことから，ECG カウンセラーは ECG 教育の中でも中心的な存在であり，非常に重要な位置にいることが分かる。そのため，MOE では周囲の教師やスクールカウンセラーたちとうまく協同し，ECG をより効果的に実施できるカウンセラーの育成が行われている。

ここで重要なことは，ECG カウンセラーの採用基準として重視されているのは，専門性ではなく「チームメイトとして共に協力し合い，働くことができるのか」であり，専門性は採用後に様々な研修を行うことで高めるという考え方である。

MOE は，ECG カウンセラーがキャリア発達の促進者となるべきであると考えており，様々な研修を通して ECG カウンセラーの専門性の向上を図っている。

その研修方法として，MOE は，ECG カウンセラーの日頃の学習機会を増やすことに非常に力をいれている。具体的に言えば，ECG カウンセラーは月曜日から木曜日は学校に勤務し，金曜日は MOE のオフィスに戻りほぼ一日の研修を受けている。その内容は，カウンセリングの練習を日常的にグループで行い，ECG カウンセラーの経験を増やすことや，練習後にチームで話し合いを重ね，議論会を開き，自分が実践で感じたことや疑問点を互いに分かち合うことであり，次回の実践の改善に繋げることを重視している。また，専門的なスーパーバイザーが設置され，そのスーパーバイザーが講義を行ったり，対談式講義を開いたりして，ECG カウンセラーの指導を担当している。MOE は，これらの方法を通して，カウンセラーにグローバルな視点を持たせ，専門的な知識とスキルを習得させることを目指している。

なお，カウンセラーだけでなく，教師に対する ECG 研修もあり，教師の学術的，実践的能力を上げることで，教師自身の相談を受ける資質を高め，生徒のニーズによりよく対応することを目標としている。

学校の視察

今回視察をさせてもらった学校の学校長に，実際，今のシンガポールではどれほどの学校で ECG が導入されているのか質問をしたところ，初めの段階では，学校での ECG の実施は確かに様々な難点が見られたが，学校からの反響を得られるので，一つの学校だけではなく，違う学校でのよい経験を活用できることもあり，今ではシンガポールの各学校は全力を尽くして，学校それぞれの特徴や生徒の発達段階を考慮しながら，ECG を実行している，と説明を受けた。

また，ECG カウンセラーは各学校に雇用されており，月曜から木曜はそれぞれ違う学校に行き，よりよい ECG 教育を実行できるように力を発揮している。以下詳細について説明をする。

Yusof Ishak Secondary School

Yusof Ishak Secondary School（以下 YI）では，シンガポール教師学院と連携をとり，学校に在職する教師の研修をしていた。またここでは NIE（国立教育研究所）とも連携をとり，教員とカウンセラーの専門性の向上を目標としていた。学校内にもケースマネジメントチームが設置されており，ここでは，教員同士や教師とカウンセラー，シニアカウンセラーの間で情報の交換や討論がされていた。このチームは，主に教師が授業中，または ECG カリキュラムを実行する際に直面した様々な問題を解決するサポートを提供していた。

前述のように，YI でも，ECG カウンセラーは周りとの連携を大切にしながら，生徒に ECG カウンセリングを行い，学校全体で ECG 教育を実践していた。そして本校の人員だけではなく，保護者や校外の連携者も生徒の全人的発達に協力をしている。ECG カウンセラーの専門性だけに頼るのではなく，教員も基本的に ECG の概念は把握しており，普段の授業でも少しずつ課程の中でキャリア教育を浸透させていた。

YI の学校長からは，授業の中で教師が常に一番に生徒に教えるべきことだと考えているのは，歩む道はたくさんあるので，生徒には人生の道は一つではない，誰かについていく必要はなく，自分の好きなことをすればいい，ということであると説明を受けた。つまり，生徒には知識ではなく情報を与え，常に Plan B を用意することも大切だと教えることで，子どもたちが自分で考えてキャリアの道を設計し，決定を下す能力を育成することを目標としていた。

ECG カウンセラーや教師, スクールカウンセラーは，生徒と一対一で面談をする場合があり，これはその生徒のことをもっとよく知り，未来のキャリアの方向と個人の素質を確かめることができると YI のカウンセラーは話していた。そして，もし生徒の素質がそのキャリアに進むのにはあまり適切でないと判断した場合，教師はその道を進むなら何が必要か，もう一度真剣に見直したほうがいいかもしれないと伝えている。このような交流はとても重要であり，豊富で正しい情報を与えれば，生徒は自分が何を選択すべきかわかる，という理念の下，YI は ECG 教育を行っていた。

また，YI では，ECG の他にも Character & Citizenship Education（以下 CCE）を行っていた。HOD によると，CCE は生徒の自己効力感を育てたり，家庭や社会と良好な関係を作る支援をしたり，生活の上で自分で未来の道を選択する力を育成したりして，生徒がよりよく社会に貢献できるよう手助けをしていた。そして，生徒の人格形成や公民としての自覚性，他人に善意をもって接すること，国への責任感などを育てることや学業と生涯指導の役割も果たしていた。

このように，YI は個人を主体とし，生徒一人一人のキャリアの発展に重点を置く ECG 教育だけではなく，社会性や情動の能力，市民性などを育成する全人的教育を進めていた。

Republic Polytechnic

Republic Polytechnic（国立総合技術専門学校，以下 RP）は，シンガポール政府の全面的な投資により開校された三年制の国立専門学校であり，生徒に将来必要とされる様々な技術を習得させることを目標としている。RP は，高校の卒業テストでよい成績を収めた学生の入学を許可しており，優秀な生徒は卒業後に NUS（National University of Singapore），NTU（Nanyang Technological University），または海外の大学に入ることが可能となっている。今回の視察では，MOE のガイダンス部門に所属するキャリアカウンセラーから説明を受け，ここでは YI とは少し異なる ECG 教育を行っていることがわかった。

RP では，学校にいる 3 年間の中のどこかで，必ずインターンシップを体験しなければならない。学校と提携している企業に 6 ヶ月インターンシップに行くことよって，働くとはどういうことか？職場環境はどうか？どのようなスキルが必要とされるのか？自分は本当にその仕事が好きか？というような質問を，生徒に真剣に考えさせることが大事だと ECG カウンセラーは語っていた。さらに国内だけにとどまらず，RP は，海外の提携企業でのインターンシップも行っていた。海外に目を向けさせることで，生徒は，外国で，異文化の中で働くことについて知ることができるとのことであった。

また，生徒は 3 年間で 60 時間（毎年 20 時間ずつ），ECG のコースを受けることとなっていた。1 年目は主にキャリアカウンセラーやレクチャラーによる授業があり，クラスでは進路や将来について考えることを重視していた。そして 2 年目には主にインターンシップ，3 年目は産業で過ごしたりするインターンシップを実施しているとのことだった。時には，企業が学校に来てプログラムをしてくれることもあるそうで，生徒の実践の機会を増やすことを非常に大切にしていた。

RP では，ECG 支援を三層としていた。第一層は，指導教員の講義を受け基本的な職業についてのアドバイスをうけること，第二層は，各学校で二つか三つ，その学校に適している ECG のイベントや活動を開くこと，そして第三層は，ECG カウンセラーによるより集中的なキャリアカウンセリングやワークショップなどを行うことであった。RP はこの三層の ECG 支援を通して，生徒のストレスを軽減させることを目的としているとのことであった。

RP の実際の ECG カウンセリングでは，カウンセラーが常に生徒に①自分は誰か？（あらゆる決断をする前に，何がしたいのか，自分の長所，好きなことは何か，を考えることが大切），②どこで働くのか？（実現可能な教育や職業の選択肢を開拓する），③どうすれば自分がなりたいものになれるのか？（正しい情報を得た上での意思決定，自分の志望を達成するための計画・目標を立てる）と問いかけているとカウンセラーから説明を受けた。ここで重要なのは両親にも正しい情報を伝えることである。親の中には自分の子どもにはこの職業しかない，と思っていることがあるため，職業につくための方法も伝える必要があるとのことであった。

ECG カウンセラーによれば，生徒からよく相談を受ける内容としては，生徒の進学に関しての問題（卒業後，大学のどんなプログラムを専攻するのが本人に適しているのか？）や就職の方向性；自己分析の支援（自分の強みや興味，価値を見つける）；就職面接の準備と履歴書作成（主に 2 年

生と 3 年生，インターンシップ用）；自分の長所をもとに，どのように職業選択の決定をすれば良いか；すでに受けているコースが自分に合わないと気づいた場合の進路変更について，など様々なものがあるとのことであった。

ECG カウンセラーはこれらの問題を根気よく生徒と共に話し合い，生徒たちの心理的ストレスを軽減させることに力を尽くしていた。そして生徒たちも ECG カウンセリングを通して，実際に学校で奨学金を獲得できたり，面接に自信を持てたり，活動を企画することでもっとうまく他人と関われるようになれたりと，実際に ECG カウンセリングを受けた学校の生徒たちは, ECG に関して多大な達成感と効力感を感じていた。

考察

シンガポールは，様々な歴史的要因があり，今では,「人材は最大かつ唯一の資源」という理念のもと，創造的で，生涯学習が可能な人材の育成に力を入れ，最終的に経済発達の促進を目指していることが，今回の研究で明らかとなった。

MOE では，生徒の社会性と情動の能力を育て，そこからレジリエンスの強化に繋げることを重視している。そのためには学校内での様々な領域で連携して，生徒の能力を高めることが大事だと考えられている。そこで，MOE は生徒指導のモデルとして, 個々のニーズにそった三層モデル, TSS を取り入れ，特に第一層の全ての生徒に対する予防的教育を重視している。

そして社会性の育成だけではなく，シンガポールの教育の一つの明確な目標として，生徒の願いを実現し，子どもが自身が到達できる最高点に行けるよう，教育システムを進化させ続け，願いをかなえられるようにサポートする，というものがある。これを実現すべく，シンガポールは，SEL に位置づく ECG に焦点をあて，その実施に多大な総力をあげている。

シンガポールの ECG 指導は，各発達段階に沿って細かくゴールを設定し，教師や ECG カウンセラーはその目標に向かって生徒のキャリア教育を行っている。ECG 教育は三層あり，一番重要なのは一層目の全生徒を対象とした, ECG カリキュラムの教育である。この段階から，ECG は担任や ECG カウンセラー, スクールカウンセラーなど異なる専門家を含めた学校全体で実施されている。そのため, ECG 教育は異なる専門家で協同して進める必要があるため，協同性が重視されている。特に ECG カウンセラーは，教育機構，スクールカウンセラー，スクールリーダー，Year Heads（学年のリーダー的存在）, など様々な人と協力して ECG の支援を行っている。そしてこの ECG 支援は生徒たちだけにとどまるのではなく，保護者も子どもと一緒に ECG の活動に参加し，展覧会を見たり講義を聴くことができる。

だからこそ，MOE は，ECG カウンセラーの採用基準として，専門性を求めるのではなく，協同性に重点を置いていると考えられる。専門性は，研修の時点で MOE や NIE と連携をとり, 研修や周りの指導員とスーパーバイザーとの討論などから育成できるが，チームの一員としてうまく連携をとることができなければ，生徒の ECG 教育に支障がでる可能性が非常に高いと思われるからである。

また，ECG 教育では，三つの重要なクエスチョン，自分は何者なのか，何を目指しているのか，どうすればそこに到達できるのかを常に生徒に問うことで，子どもたちが自分で自分の歩む道について思考を凝らして選択し，決断を下す力を育成していると考えられる。このような質の高いカウンセリングの指導を行うために，MOE は質の高い, ECG を効果的に実施できるカウンセラーの育成をとても大切にしている。

ECG カウンセラーの採用基準は専門性ではないが，採用後のトレーニングは徹底的に行われている。毎週 MOE で半日から一日の研修を行うことや，日々の議論や分かち合い，強力なスーパーバイザーのシステムがあるからこそ, ECG カウンセラーは徐々にスキルや知識を蓄えていき，生徒と面と向かって将来を共に考え，話し合い，一対一の面談式で，質の高いカウンセリングを行うことができるのである。これこそが生徒の効力感に繋がり，シンガポールの高い学力と全人的教育が形成されていくと考えられる。

日本の課題

ECG では，①自分は何者なのか，②何を目指しているのか，③どうやったらそこに到達できるのか，の 3 つの目的と，その指導のために各発達段階に合わせて具体的な目標が示されている。日本では，分野や職種にかかわらず，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力として，基礎的・汎用的能力の育成をキャリア教育の目標の 1 つとしている。基礎的・汎用的能力とは「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課

題対応能力」「キャリアプランニング能力」の 4 つであり，これも発達段階ごとの具体的な目標が設定されている（文部科学省，2011）。このように，両国とも目的とそれに沿った発達段階ごとの目標は示されている。

シンガポールではその実施のため，中核を担う ECG カウンセラー等のキャリア教育の専門職を配置している。一方日本では，現段階でそうした専門職は配置されていない。また，チーム学校として専門職と連携をしようという動きはあるものの，キャリア教育の専門職については記載されておらず，配置される見通しもない。韓国でもキャリアの専門職として進路・進学相談教諭が配置されており，今後キャリア教育を発展させていくためにはシンガポールや韓国のような専門職の配置が必要になってくるだろう。

また，ECG は 1～3 次までの支援と捉えられている。そこに ECG カウンセラーなどのキャリア教育の専門家が配置されており，その専門家が保護者，教育行政など様々な人・機関と連携をとりながらすすめているのだが, ECG カウンセラーは, キャリア教育のプログラムの作成やコンサルテーション，保護者との連携，キャリアカウンセリングといった 1 次から 3 次まで幅広くキャリア教育に携わっている。日本では，チーム学校の動きの中で SC や SSW の導入の方向性が示されたが，SC が第 1 次支援に関わるという視点は弱い。心理社会的発達の促進を 1～3 次までの支援という視点で捉え，専門職と 1 次支援から連携していくことも重要だろう。

以上のような，専門家と連携したキャリア教育の 1～3 次支援の実現のため，ECG カウンセラーの研修体制が整えられていたり，教員研修が年間 100 時間設けられていたりと，専門職も教員もともに研修体制が確立されている。一方日本では特にそうしたキャリア教育を推進するための研修体制が整っていない。そのため，日本の小学校のキャリア教育の課題として，基礎的・汎用的能力に関する教員の理解が不十分であることやキャリア教育の全体計画の作成は 6 割，年間指導計画の作成は 5 割程度にとどまっていることがあげられる（日本国立教育政策研究所，2014）。また，そのほかの課題としてキャリア教育に関する校内研修に参加したことがない教員が小学校教員は 6 割，中学校や高等学校は 5 割を超えており，教育活動全体を通じた系統的なキャリア教育実践のため研修に参加し全担任に理解を深めることがあげられている（国立教育政策研究所，2014）。つまり，シンガポールは専門職と教員ともに研修体制ができキャリア教育を発展させているのに対し，日本は研修体制ができておらず，キャリア教育の理解や実施面で大きな課題があるため，研修体制を整えていく必要があるだろう。

以上のことから，日本のキャリア教育の発展には，専門職を配置すること，1 次から 3 次という視点でとらえ 1 次から専門職と連携すること，そして研修体制を整えることが必要になってくるであろう。

引用文献

SIM CHOON KIAT　シンガポールの教育とメリトクラシーに関する比較社会学的研究　東洋館出版社，2009

山内乾史，杉本均　現代アジアの教育計画（下）学文社，2006

Ministry of Education　Overview of Education and Career Guidance(ECG) Implementation in Singapore Schools 2017

日本国立教育政策研究所 :「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」パンフレット－学習意欲の向上を促す　2014

文部科学省：チームとしての学校のあり方と今後の改善方策について（答申）　2015

文部科学省：児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～（報告）2017

中央教育審議会：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）　2011